中田一郎訳

『原典訳 ハンムラビ「法典」』

(古代オリエント資料集成 1)

リトン, 1999年, xvi+233頁, 定価3,000円+税

依 田 泉^{*}
YODA Izumi

『ハンムラビ法 (律集) (Hammurabi Laws)』の日本語による完訳が世に問われるのは、原田慶吉著『楔形文字法の研究』⁽¹⁾以来のことである。なぜ、半世紀もの間、新しい翻訳は現われることがなかったのだろうか。おそらく、このテキストをより深く理解するためには、ただ文法書や辞書からの知識によるだけではなく、重複するまたは隣接する時代や地域から生み出された数多くの関連資料や、さらには、それらを扱った研究へと視野を拡大することが求められ、そこに待ち構えているのは労苦に満ちた過程だったからではないだろうか。今回、本書は、その重要性のゆえに、このように困難な事業をあえて引き受けて見事に成し遂げたのである。

まず、第一の目的である本文の日本語訳が綿密に施されている。最もまとまったテキストを提供するルーブル美術館所蔵の「法典碑」だけでなく、様々な時期や場所から発見された他の写本の情報も取り込み、必要に応じてその異同を考察しながら、堅実な文献学的手法、すなわち、文法や語彙の詳細な検討を土台としている。このような基礎作業が、最近の成果を踏まえた上で、古代メソポタミア史にとって極めて価値のある文書に施されたことの意義は測り知れない。

また、本書の読者は、後半の「注解」と「解説」へと分け入るにつれて、単に『ハンムラビ法』というひとつの資料についてというよりも、むしろ、メソポタミアという地域の古巴ビロニアという時代の社会全体について幅広く説明を受けているような思いにとらわれるのではないだろうか。そして、それによって、『ハンムラビ「法典」』をめぐる、陥りがちな先入観や誤解を修正し、あいまいだった点を可能な限り明らかにし、気づかれていなかった側面を浮かび上がらせている。たとえば、「ハンムラビ」という人名の解釈を、最近の異説を含めて紹介し、音訳表記が単純に決定できないことを伝えている (151-153頁)⁽²⁾。さらに、この文書の性格の問題、すなわち、それが何のために作られたのかということについても、錯綜した論点を明解に整理して提示し、「法典」ということばに潜む落とし穴にも注意を喚起している (159-166頁)⁽³⁾。

* 常磐大学助教授
Associate Professor, Tokiwa University

以下では、「目には目を、歯には歯を」という決まり文句に象徴され特に注目される刑罰の問題と、多くの論議を呼んでいる『ハンムラビ法』の目的や性格の問題を主に取り上げたい。その際、評者の関心である比較法思想の意識を交えて、いくつかの点を指摘することになろう。そして、日本における古代メソポタミア研究に新たな展開をもたらした本書が、バビロニアの「法と社会」の解明をさらに促すときに、本稿がともにひとつのきっかけとなれば、と願うものである。

『ハンムラビ法』の内容でもっともよく知られているのは、おそらく、「目には目を、歯には歯を」という一節であろう。そして、このことばに代表される刑罰の方針は、「タリオの原則 (lex talionis)」と呼ばれ (135頁)、§196から§208までの「条文」群で表現されている。一例として、§200は、歯に対する傷害について、「⁽⁴⁾もしも、人が自分と同等の⁽⁵⁾ (階層の) 者の歯を打ち落とし (<投げ) たならば、その者の歯を打ち落とす」(私訳、以下同じ) と命じる。身体の一部または人命が損なわれたときには、それに対応するものを加害者からも取り去る、という思想である。これに、類似した「刑罰規定」は、旧約聖書にも見出される。⁽⁶⁾

この原則は、日本語でしばしば「同害復讐法」と言いならわされている。しかし、「復讐」という訳語には問題があろう。なぜなら、それは、日本でいう「仇討ち」とか「仕返し」のような、個人間の行為ばかりを連想させるからである。ハンムラビ碑文や同じ原則を採るとされる旧約聖書では、一定の公の権威による刑罰について論じられている可能性も少なくないのであるから、和訳を、むしろ「同害報復法」または「同害制裁法」としてはどうだろうか。その点、本書が主に「タリオ」ということばをそのまま使い誤解を避けようとしていることが評価される (136頁注124)。⁽⁷⁾

さて、「目には目を」の原則に対して、同じメソポタミアの他の時代では、別の処罰形式が知られている。すなわち、『ハンムラビ法』(紀元前1750年頃)⁽⁸⁾ ならば同害罰を施すような場面で、銀の引渡し⁽⁹⁾ が命じられているのである (137-141頁参照)。シュメール語によって書かれたより古い『ウル・ナムム法』(Ur-Nammu Laws—紀元前2100年頃) を例にとると、「人が、刀(?)で、人の歯 (または鼻) を切ったならば、2/3 ミナの銀を支払う。」 (§17) と定め、ほかに、魔術や姦淫のために人を訴えながら川による神明裁判で相手の有罪を証明できなかった告発者 (§§10-11) や、偽りを語ったことが明らかになった証人 (§25) に対しても、同様の支払いを命じている。また、『エシュヌナ法』(Eshnunna Laws—紀元前1800年頃) も、『ハンムラビ法』と同じアッカド語の文書でありながら、この件については、むしろシュメール語の『ウル・ナムム法』と一致している。⁽¹⁰⁾

ハンムラビよりも前の時期の法律集が、「目には目を、歯には歯を」ではなく、いわば「目にも銀を、歯にも銀を」という原則を採っているのであれば、同害制裁が、「遅れて

いる」「残酷な」方法で、後代になってより「進んでいる」「穏健な」罰金に取って代わられた、という想定は適切でないことになる。⁽¹¹⁾さらに、時間軸に沿ってタリオから金品支払いに一直線の「発展」を見るこのような解釈への反論の根拠となるのは、同一の「法」の中に2種類の処罰形式どちらもが言及されていることである。たとえば、『ハンムラビ法』で、突き癖があって人を死なせてしまった牛の持ち主の場合 (§251) には、1/2 ミナの支払いによる決着が図られていて、タリオ刑の代わりに罰金刑が用いられているように見える。同じように、旧約聖書も、十分に見張らなかったために自分の牛が人を突き殺した飼い主に対して原則として死を定めている箇所 (出エジプト記 21 : 28-29) の直後に、「贖い金」の支払いによって、牛の所有者の命が救われる可能性を示している。(30節、147頁も参照)。つまり、人の命または身体に害を及ぼしたため対応する自分のものを差し出さなければならないはずの者が、ほかの価値の提供によって赦されるというものである。

ひとつの法文書の中に、違った解決策があるというのは、見方によれば、「体系のほころび」である。では、なぜこのようなことが起こったのだろうか。これに対しては、その時代に身体刑と財産刑が同時に考えられていたから、という解答がありうる。⁽¹²⁾つまり、そこには同害罰以外の選択肢が設けられていたということである。同害報復は、今日の刑罰とは違い、たとえ構成要件が整っても常に厳密には実施されるものではなかったであろう。§230について本書が「実際にはタリオの原則が文字どおり実行されていたかどうか疑問で、殺されるべき子供の命の贖い金を支払うことで過失致死が金銭的に解決されていたものと思われる」と説明する (145頁) のも十分肯ける。この見解は、バビロニアだけにとどまらず、「目には目を」を主張するもうひとつの地域であるイスラエルの脈絡にも当てはまると思われるので、より広い視野での議論が必要となる。すなわち、「目には目を」という「規定」は、古代のバビロニア人とユダヤ人どちらの社会でも、あまり実行されていなかったのではないかと、⁽¹⁴⁾ということである。

タリオの原則が、実社会にはそのまま適用されていたとは限らないのだとすると、なぜ『ハンムラビ法』や旧約聖書はそれを書き記したのだろうか。考えられるのは、「立法者」の価値判断を表明するためであった、という解釈である。つまり、人間の生命や身体に損害を加えるということがいかに重い罪であるかを宣言し、そして、このように深刻な罪は犯してはならない、と警告し抑止する役割を果たしていた、と言えないだろうか。

同様の見方はより大きな対象にも向けられる。つまり、「法律集」も全体として、いつもすべてそのまま実現されるためのものではなかったのではないかと、ということである。いったい、『ハンムラビ法』は何の目的で作成され、どのような性格付けをされるべきなの

だろうか。この点については、実にさまざまな議論があり、本書がその状況を詳しく追求している（159-166頁）。ここでは、それらとともに、ひとつの提案として、『ハンムラビ法』や旧約聖書の律法は、その起草者のもつ理念、もっと言えば、正義の基準を宣告するはたらきを担っていた、と主張したい。⁽¹⁵⁾ この提案にしたがえば、命令ともとれる内容が必ずしも現実に行われたわけではないことになる。

次に、本書でも考慮されていることであるが（たとえば、135、143頁など）、ハンムラビの法律集と旧約聖書の「律法」の関係、特に、刑罰について同一の原則を採っていると言われる両者の間に見出される違いにも注意を向けたい。たしかに、どちらの文書も、「同害報復の原則」を打ち出しているし、また、同じように罪の償いとして金銭の提供も認めている。そこで、このふたつは全く同じ前提に立っているかに思えるが、実はそうではない。表面上同じように見える聖書と『ハンムラビ法』の根底には、互いに異なる思想がある。

まず、財産を損なう罪と人命を損なう罪について見解の相違があることを Greenberg も指摘している。⁽¹⁶⁾ 既に触れたとおり、突き癖のある牛が人を死なせてしまった事例で、『ハンムラビ法』は、1/2 ミナの支払いによって解決している（§251）。⁽¹⁷⁾ これに対し、旧約聖書の律法は、人の命が失われたときに、原則としてそれを奪った人の命を求める（出エジプト記 21：28-30）。逆に、財産についての罪に対して、メソポタミア法は、厳しい処罰を課し、死刑さえも定め（§§6-25、本書82頁以下）、⁽¹⁸⁾ たとえば、「人が家に侵入したならば、その侵入（現場）の前で殺され、吊るされ」「人が強盗を働き、捕まったならば、その人は殺される」（§§21-22）⁽¹⁹⁾ のである、ところが、聖書は、そのような場合に、賠償を原則とし、たとえば、出エジプト記 22：1-4 は、生じた損害を「2倍にして償わなければならない」と語っているのである。⁽²⁰⁾

ただし、この問題は必ずしもそれほど単純に割り切れるわけではない。『ハンムラビ法』は、財産に対する罪による死刑に対して一定の例外を認めており、§6 では、盗品の30倍を差し出すという方策も定めている。これについて、対象が「敷地内」にあったか「敷地外」にあったか、という違いから来ている、という解釈が示された（83頁）が、ここでは、理念の表明と現実の解決策が混在している、という可能性を提起しておきたい。また、盗品の売買において、§9 が窃盗犯であった売り主の殺されることを定めているのに対して、§12 には、本人が死亡しているという違いだけで、「5倍の支払い」という別の取り扱いが現われるのである。⁽²¹⁾

もうひとつの主題として、子どもの扱いについても興味深い観察が報告されている。⁽²²⁾ 一方で『ハンムラビ法』は、刑罰に関係するときに、子どもを親の所有物のように捉えている。差し押さえた時の虐待によって、妊婦に対する打撃によって、また、劣悪住宅の

倒壊によって、人の子どもの命を奪った者は、その本人ではなく自分の男子または女子を失う、と言うのである。⁽²³⁾ いわば、「目には目」という命題が、「息子には息子、娘には娘」というところまで拡大されている。

他方で、聖書は、子どもを独立の人格と見ている。子供は親の罪の影響を受けないことが主張されているからである。人間の尊重について長幼の別がそこにはない。たとえば、申命記 24：16 では、父親は子どものために、子どもも父親のために殺されてはならず、殺されるのはただ自分の罪のためだけだ、と言われている。また、突き癖のある牛の注意を怠った持ち主について述べている出エジプト記 21：31 の「男の子を突いても、女の子を突いても」という言い回しも、グリーンバークによれば、⁽²⁴⁾ 親の過ちの償いに子どもが用いられる、という古代西アジアの発想に対して、反対の立場を表明しているものなのである。

このように、『ハンムラビ法』と聖書は、刑罰について同じ方針をとっているようではあるが、人間と財産に対する態度からすれば、『ハンムラビ法』が他のメソポタミア法と軌を一にし、聖書は独自の方向に進んでいると言える。しかし、上で述べたように、おのおの「規定」は必ずしも厳格には適用されなかった可能性があるのも、すべては、あくまで思想の表明という面でのことであり、実際に行われていたという面で判断されるべきではないだろう。⁽²⁵⁾

本稿では、特に刑罰という面に着目して論点を提示してきたが、もちろん、『ハンムラビ法』には、さまざまなその他の主題が含まれている。たとえば、結婚や離婚や養子など家族の問題、また、農業や商業などの経済活動など多くを考察の対象とすべきであろう。実際、本書は、そのような分野をいねいに検討している。その導きによって『ハンムラビ法』の語る世界に入っていくならば、当時の社会の広がりを実感させられるに違いない。

おりしも、2000年の後半には、NHK によって「四大文明展」が各地で開催され、メソポタミアの企画には、ルーブル美術館からまさに「ハンムラビ法典碑」そのものが出品されることとなった。古代メソポタミアに一般の注目が集まる中で本書が世に出たのは、いかにも時宜を得たものである。この機会に、『ハンムラビ法』の石碑という見えるものだけでなく、そこに記されている思想にもさらに多くの関心が寄せられ、古代西アジアについていわば表面だけの知識に満足するのではなく、より深く探求し理解する姿勢が、現代日本の社会に広く行き渡ることを心から望みたい。

注

- (1) 原田慶吉 (1967)『楔形文字法の研究』清水弘文堂 (初版は弘文堂1949年)。
- (2) 以下でページ数のみを示したのは本書におけるそれである。
- (3) このような見解を反映しているのが、法典という単語に付け加られた括弧なのである。
- (4) 古巴ビロニア時代の「階層」およびその刑罰との関係は、83-96, 135-136頁で論じられている。
- (5) §196は目についての、§197は骨についての規定である。ほかに、未遂でも同様の扱いがなされる例として、§2 (魔術の告発) と§§3-4 (偽証) がある。なお、シュメール語による『リピト・イシュタル法』(紀元前1850年頃)の§22 (誣告一般) と§26 (偽証一般) もこの原則を採っている、と解釈される。
- (6) 出エジプト記 21: 23-25, レビ記 24: 19-20, 申命記 19: 18-19 など。
- (7) 刑の執行方法については、141-142頁で、文法形式が実態を反映しているのか、という点との関連づけの中で解説されている。また、同じく139-140頁では、ハンムラビの時代のバビロニアでは個人による復讐も容認されていた、という Westbrook の学説も紹介されている。
- (8) 「法律集」の年代は, Tikva S. Frymer-Kensky (1980), “Tit for Tat: the Principle of Equal Retribution in Near Eastern and Biblical Law,” *Biblical Archeologist*, 234 による。
- (9) ただし、§26は「目には目を」の原則にもとづく、とも解釈される。
- (10) 『エシュムンナ法』は、傷害の程度によって量の異なる銀の支払いを求めている。すなわち、鼻または目の切断は1 ミナ、歯または耳の切断は 1/2 ミナ、顔の殴打は10 シェケル (以上、§42), 指の切断は 2/3 ミナ (§43), 手または足の骨折は 1/2 ミナ (§§44-45) と定めている。そして、この銀の量の違いによって、当時どの身体部位がどれくらい重要視されていたかが、窺い知られるのである。
- (11) 136-137頁に紹介されている「古典理論」も参照。また、主にヘブル語とアラム語で書かれた旧約聖書と、アモリ人であったハンムラビの「法碑文」に、西セム系という共通の背景を見て、「目には目を」の原則は、西セム人がメソポタミアに持ち込んだ、という主張もある。Frymer-Kensky (1980), 233参照。
- (12) ただし、この現象を時代の異なる資料の存在によって説明しようとする試みもある。この立場については、Moshe Greenberg (1960), “Some Postulates of Biblical Criminal Law,” in *Yehezkel Kaufmann Jubilee Volume*, 5-7参照。
- (13) この見方は、139-140頁に提示されている Cassuto や Westbrook の意見に近い。
- (14) その関連で、旧約聖書の中には犯された罪に死刑が適用されなかった例がある、という点を指摘することもできよう。たとえば、部下の妻を奪いその夫を死なせながら生き長らえたダビデ王である。ただし、その場合は代わりの者が罰を受けた、という解釈がある。とは言え、本人の命が何らかのかたちで救われている、つまり、法律上

は罰せられなかった、ということはやはり特筆に価する。

- (15) これは、162頁に紹介されている Finkelstein の主張とある程度重なっている、と言える。
- (16) Greenberg (1960), 13-20は、財産と人間の扱いに聖書独自の原則が現われていることを強調している。これに対し、Bernard S. Jackson (1975), “Reflections on Biblical Criminal Law,” in *Essays in Jewish and Comparative Legal History*, Leiden: E. J. Brill, 25-63 は、批判を加えているが、Moshe Greenberg, “More Reflections on Biblical Criminal Law,” in S. Japhet (ed.), *Scripta Hierosolomitana* 31 (1986), 1-17 (特に 4 頁以下) は、さらにその批判に応えている。
- (17) エシュメンナ法§54も、2/3 シェケルと額こそ違うが、銀の提供を求める、という点では共通している。
- (18) 本書は、その理由を「国家あるいは社会にとって特に重大な犯罪とみなされ」ているため、と説明している (82頁)。
- (19) エシュメンナ法§13にも「夜に家の中で捕まったものは死ぬ。生きることはない。」とあり、同様である。なお、強盗について述べている§23は、公的な被害者救済の最古の例として、被害者学の基本文献で紹介されている。“The earliest reference to governmental compensation for crime victims can be found in the ancient Babylonian Code of Hammurabi...” (Andrew Karmen (1996³) *Crime Victims: An Introduction to Victimology*, Belmont: Wadsworth Publishing Company, 324)
- (20) Greenberg (1960), 17-18参照。
- (21) なお、この問題との関連で、§13の「その人」が誰を指すかについては、同じ「嘘つき」ということばにより§11との結びつきで捉えられるので、なくなった対象の「所有者」だと考えられる。
- (22) Greenberg (1960), 20-27参照。そこでの要点は、子どもの処罰の禁止も聖書独特ということである。
- (23) このような対応は「代理処罰 (vicarious punishment)」と命名されている。Greenberg (1960), 20参照。
- (24) Greenberg (1960), 22-23参照。
- (25) 当時の実社会で何が行われていたかについては、いわゆる「行政経済文書」など別の種類のテキストから知らなければならない。